

# 九州情報大学学術・教育研究所報

第6号 令和5(2023年)3月

## ◆令和4(2022)年度学術・教育研究所センター活動報告

### ・生涯学習センター

センター長 平田 毅 教授

生涯学習センターは生涯学習推進のため、広く地域のニーズに即した各種公開講座や講演会などの企画・開催を通して、本学の研究・教育の質的な向上を図るとともに、本学が蓄積する研究・教育の成果を幅広く地域の教育文化の発展向上のために還元し、社会貢献に期することを主な目的としている。

令和2(2020)年度から令和3(2021)年度にわたる2年間は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で活動の休止も余儀なくされたが、今年度(令和4年度)の公開講座は初回9月の1回目の講座を除きほぼすべてのスケジュールを実施することができた。また地域情報センターと連携した水城小学校パソコンクラブへの学生派遣の取り組みも感染症の影響を受け回数は減少したものの実施することができた。

### 1. 公開講座の企画・開催の概要

令和4年度は、情報系6講座、語学系2講座、自然科学系1講座の9講座を企画した。このうち情報系1講座は中止したものの他の講座はすべて実施することが出来た。9日間8講座、受講者総数は延べ148名であった。以下に示した表がその詳細である。

令和4年度 公開講座の実施・開講の一覧

種別	講座名	開催日	時間	受講者数	講師	学生サポート人数	
語学	「英検」面接試験 対策講座(1)-①	6月18日	土	10:00-12:00	9	教員	1
	「英検」面接試験 対策講座(1)-②	6月25日	土	10:00-12:00	8	教員	-
科学	ほしぞら観察会	8月23日	火	19:00-21:00	60	教員	4
情報	はじめてのパソコン① ~基礎・インターネット編	9月6日	火	10:00-12:00	中止	-	-
	はじめてのパソコン② ~ワード前編	9月9日	金	10:00-12:00	9	学生	8
	はじめてのパソコン③ ~ワード後編	9月9日	金	13:00-15:00	9	学生	9
	はじめてのパソコン④ ~エクセル前編	9月13日	火	10:00-12:00	11	学生	10
	はじめてのパソコン⑤ ~エクセル後編	9月13日	火	13:00-15:00	11	学生	9
語学	「英検」面接試験 対策講座(2)-①	10月22日	土	10:00-12:00	5	教員	-
	「英検」面接試験 対策講座(2)-②	10月29日	土	10:00-12:00	9	教員	-
情報	ワードとエクセルで年賀状を作ろう!!	11月18日	金	10:00-12:00	8	学生	5
		11月22日	火	10:00-12:00		学生	8

### 2. 学生講師・学生サポーターが情報系講座を担当

本センターの情報系の公開講座は、積年にわたって本学学生が講師を務めてきた。またほぼすべての講座において、学生が受講生のサポートや講師の補助を担当している。情報系の講座の場合、講師担当の学

生は、講座のテキストを自ら作成し、そのテキストを使用しサポーターの学生とともに、講座の運営に当たる。これは本センターの公開講座の独自の特徴であるといえる。情報系パソコン講座の場合、受講生 1～2 名に対して 1 名の学生サポーターが付いて、随時懇切丁寧な支援を行うため、受講生の理解も円滑に行われる。

こうした要因からか、本センターの情報系講座の評判は非常に高い。受講生の概ねが講座に満足していることが毎年、講座後のアンケートからも窺える。

しかし、近年その学生人材確保が困難になってきている。全体の学生数が減少してきたことにより、同一学生が繰り返し講師・サポーターを務めなくてはならない場合が増加している。それぞれの公開講座の学生講師・学生サポーターを限られた少人数の学生に対して依頼せざるを得ない状況が続いている。しかも、講座開催時間と履修授業が重なっていることも多く、自ずと上級生（4 年生）に頼らざるをえない。このことは、講師・サポーターの世代交代がスムーズに運ばない事態を招いている。

本センターの公開講座は、情報系を中心として、本学学生の知識技能の定着化やスキルアップ、キャリア形成に寄与している部分も多いため、学生人材の養成は大きな課題の一つである。

## 2. 教員講師による講座の新設

一方、今年度は本学の教員が講師を務める公開講座にも力を入れた。

語学系の「英検」面接対策講座はその一つである。クリス・フリン教授に担当していただき、インタラクティブな講義形態と本番の面接試験さながらの個別指導も交え、受講生からは高評価であった。中学生・高校生の参加が多かったのもこの講座の特筆すべき特徴である。この講座は、好評だったため前後期それぞれ 2 回開講した。

また、秋吉浩志准教授による「星空観察会」も地域貢献に資する試みであった。本学の天文サークル「だざいふ星空研究会」の学生もサポーターとして参加し 8 月に開催された。当日は開講時刻直前にあいにく天候が悪化し、急遽教室でのスライドを使用した講座となってしまったが、数多くの親子連れの参加があり、夏休みのひとときを星空談義で飾った。

生涯学習センターの目的が「本学が蓄積する研究・教育の成果を幅広く地域の教育文化の発展向上のために還元」にあることを踏まえるならば、今後本学教員スタッフによる公開講座の充実も課題であり、そのための一歩となる二つの講座を開設できたことは意義深い成果であると考ええる。

## はじめに

地域情報センターは、平成 24 (2012) 年に開設されて今年度で 11 年目を迎えた。いままで甕島での「アイランドキャンパス」の取り組みと、地元太宰府の水城小学校「パソコンクラブ」への学生サポートの派遣の二つを柱として、取り組みを推進してきた。

本センターとしては、地域交流・地域貢献に本学の人的・知的資源を活用しつつ、そこに参加する学生がそれらの活動を通して諸能力の向上を図るといった目的のもと、これらの事業に取り組んでいる。平成 31 (2019) 年から地域の情報発信事業「だざいふなび」(太宰府市商工会)の会員向け情報発信サポートが、本センターの新しい事業として加わり、店舗・企業のホームページ編集作業等のサポートとして本学学生が積極的に参加した。これは、情報発信の教育の一助となるとともに、「情報大学」としての本学の存在意義を地域にアピールする点で意義のある活動であったと言えるだろう。

また、令和 4 年度は昨年度に引き続き、2 回目となる公開講座「夏の星空案内」を開催した。これは、さらなる地域貢献を目的として、本学の学生サークル「だざいふ星空研究会」を主体として実施されたものである。今年は 8 月 23 日(火)に開催したが、天候悪化のため予定されていた学外の観望会は実現できず、急遽本学 162 教室にて「夏の星空お話し会」を開催することになった。その際なかなか準備が行き届かず、参加者に不快な思いをさせてしまったことは反省点であり、次回開催に向けて今年度の反省を生かしていきたいと思っている。

新型コロナウイルス感染症が爆発的に拡大したことにより、本センターの活動には少なからず影響を被った。甕島での「アイランドキャンパス」プロジェクトは今年度に再開を果たしたが、「だざいふなび」会員サポート事業は昨年同様、ほとんど実施することができなかった。しかしながら同感染症は次第に下火になりつつあることから、それとともに本センターの活動は計画通りに行われるようになっていくと思われる。

以下では、本センターの今年度の主な活動状況についてその概要を報告する。

## 1. 甕島「アイランドキャンパス」の取り組み

平成 24 (2012) 年から実施してきた鹿児島県薩摩川内市甕島をフィールドとした地域交流・地域実践の試み(甕島「アイランドキャンパス」プロジェクト)は、令和 2・3 年度の 2 年間は活動を休止せざるをえなかった。しかしながら令和 4 年 3 月には、2 年半ぶりに学生とともに甕島を訪ね、「アイランドキャンパス」再開のための事前調査を実施することができた。コロナ禍の令和 2 年夏に甕大橋が竣工・開通以来、私たちはようやく甕島へ渡ることができた。これ以降、日ごろから甕島への想いを抱いていた平田ゼミの学生を中心にして、今年度の甕島「アイランドキャンパス」実施に向けた取り組みを進めていったのである。

甕島における「アイランドキャンパス」プロジェクトの中核的な取り組みとして、例年 9 月末に行われる瀬々野浦地区の運動会への本学学生の参加があげられる。しかしながらコロナ禍のあいだは、この運動会の開催は見送られていた。今年、3 年ぶりに「アイランドキャンパス」が再開されることとなり、本学学生は運動会をはじめとしてそのほかの催事に積極的に参加した。はじめて参加した学生ばかりだったこともあり、催事プログラムの内容は学生に甕島を「体験」してもらうことで、「発見」する場となるように

心掛けた。たとえば、甌島で島の風景を取り戻す活動を 10 年来精力的に取り組んでいる山下賢太さんの話をしっかりと聴くことができたのは成果であった。また、ハニー工房の活動など地元ならではの製品の開発といった新しい息吹きも知ること出来た。そこには常に若い人たちの動きが存在していた。それらの潮流に本学学生たちが触れることで、今後の「アイランドキャンパス」プロジェクトの原動力と糧になれば良いと考えている。

令和 4 年 10 月 29・30 日に開催された学園祭では、3 年ぶりに本学にて「甌島フェア」が開催された。従前の形にまで戻すには至っていないが、タカエビとキビナゴの提供を通して、甌島を多くの方々に知ってもらい（思い出してもらい）取り組みを再スタートできたことは、今後の甌島「アイランドキャンパス」プロジェクトの継続と発展に繋がっていくと期待している。

そして令和 5 年 3 月末には、次年度の「アイランドキャンパス」プロジェクトの成功に向けて、甌島へ事前調査のために赴く予定である。‘コロナ以前’のサイクルに戻ってきたことを実感している所以である。

## 2. 水城小学校「パソコンクラブ」へのサポート学生の派遣

太宰府市立水城小学校の「パソコンクラブ」（月曜日 6 時間目）への学生サポーターの派遣は、太宰府市教育委員会生涯学習課（当時）の要請により、平成 25（2013）年から実施しており、今年度で 10 年目となった。

初年度は、同小学校・本学とも児童支援のあり方をめぐって模索の状態であったが、3 年目からサポーターとして参加した学生達が立案・実施の主体となって実際の運営を任されるようになった。それに伴って、学生の参画主体としての自覚も育つようになってきたように思う。

この事業は、本学の生涯学習センターと連携した事業でもある。同センターの人材バンク登録学生に依頼して毎回学生を派遣している。その際、教職課程履修者に重点的に声をかけ、彼らの教育実習の事前事後学習としての意味も持たせるようにしてきた。

今年度に、水城小学校パソコンクラブへサポーターとして派遣された学生は、延べ 16 人（7 回派遣）であった。当初の計画では 10 回派遣の予定だったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため 7 回にとどまった。学生サポーターの活動内容は、パソコン教室等で使用されている小学校向け学習ソフト「ジャストスマイル」を利用した活動への支援、およびロイロノートというお絵かきソフトを活用した講座を行った。全体進行を担当する学生と個別の児童をサポートする学生とに役割を分担し、児童一人ひとりに寄り添うサポートを行った。

今後の課題は、昨年度同様に学生サポーターの確保と世代交代の円滑化、そして活動内容の充実・創意工夫である。

### 令和4年度 水城小学校パソコンクラブへのサポート状況

日程	活動内容	児童数	学生数	日程	活動内容	児童数	学生数
1 4/24	クラブ開き	未開講	0	7 11/14	ロイロノートお絵かき	20	2
2 5/9	担当者打ち合わせ	未開講	0	8 12/19	コロナ禍のため	未開講	0
3 6/13	タイピング練習	19	3	9 2/13	ロイロノートお絵かき	20	2
4 7/4	タイピング練習	20	3	10 3/6	ロイロノートお絵かき	20	2
5 9/5	ペイントお絵かき	20	2	延べ合計		139	16
6 10/18	ペイントお絵かき	20	2				

※12月19日はコロナ禍のため、中止した。

### 3. 太宰府市商工会主管ポータルサイト「だざいふなび」へのサポート学生の派遣

令和元（2019）年10月より、太宰府市商工会が主管する太宰府観光ポータルサイト「だざいふなび」に参加している店舗や企業の情報発信のサポートを学生が主体となって行うことになった。主な活動内容は、写真、動画、文章のアップロード作業、ならびに SNS 情報発信サポートなどである。実際の活動内容については、『九州情報大学学術・教育研究所報』第5号を参照ありたい。

令和4年度は前年度同様にコロナ禍のため、「だざいふなび」サポート事業は引き続き中止された。同事業のための本センターの予算は計上されていたが、実際の活動は事前打ち合わせへの出席1回のみにとどまった。

なお、令和5年度のサポート事業については、「だざいふなび」側と連絡を密にしながら進めていく所存である。この事業は、学生の ICT スキル向上に大いに資するものであるため、学生に対しても積極的参加を呼びかけていきたい。

### 4. 公開講座「夏の星空案内」(地域情報センターと生涯学習センター共同企画)

令和4年度も前年度に続いて、太宰府市内外の市民向け天文教室「夏の星空案内」公開講座を企画した。案内人・講師は本学の学生サークル「だざいふ星空研究会」顧問の秋吉（筆者）と同サークル所属の学生1名が務めた。

この公開講座への参加を広く募ったところ、定員20名を超えて多数の応募があった。そこで50名程度まで収容人数を増やして開催することになった。しかし当日は急に天候が悪化し、さらにコロナ感染の再拡大の影響を考慮して、結局野外での星空観察は取りやめとなった。そこで急遽、本学162教室にて「夏の星空お話し会」を代替イベントとして開催した。野外での星空観察は、令和5年度にあらためて計画することになった。

#### ●8月23日(火)「夏の星空案内」実施内容について

- ・参加者数 総計57名
- 本学教員3名、本学学生7名（だざいふ星空研究会所属）、天文ボランティア3名（学外）
- 一般参加者44名（大人22名、中学生1名、小学生以下21名）
- ・「夏の星空お話し会」（雨天時）：19:30～20:10 下記の内容を中心にお話し会を行った。

- ①天文ソフト「ステラナビゲーター」を使って夏の星空の案内、星空観測に適した本学の立地条件も説明。
  - ②国立天文台 4 次元デジタル宇宙プロジェクトで開発している 天文学の様々な観測データや理論的モデルを見るためのソフトウェア「MITAKA」を活用して、私たちの住んでいる地球や銀河系などの説明。
  - ③晴れたときに実際見える夏の有名な星や星座を説明。
  - ④今後行われるイベント（学園祭、11月8日皆既月食）の説明。
- ※お話し会は自由参加にしたため、実際に出席した一般参加者は当初より減って 30 名弱だった。

## 5. まとめ

令和4年度の地域情報センターの活動は、前年度同様にコロナウィルス感染拡大のために大きな支障が出たと言わざるをえない。次年度4月からの活動も諸状況を見定めながら行わざるをえないが、ともあれ上記の活動をできるだけ継続していきたい。そして Facebook ページ等の SNS も有効に活用しながら、地域情報センターの諸活動を積極的に情報発信していきたい。

### ・基礎学習支援センター

センター長 宮崎 武 専任講師

#### 1. 学生相談室の活動について

基礎学習支援センターの目的は、リテラシー学習領域や基礎総合科目に係る学生の学習支援をすることにある。前年度に引き続き学習相談室を開設した。今年度から新型コロナウイルスの対策緩和により対面授業を基本としたため、学習相談室も3年ぶりに対面形式で行った。相談員の担当者と打合せの上、場所を2階のPCクリニック内から学生の目に付きやすい1階のカフェテリアに移動した。併せて Zoom を用いた学生相談室も併設することとした。

学生相談室の開室時間は毎週月曜日と木曜日の 12:00 から 13:00 の 1 時間とした。これは、1 年生の必修科目が前後にある月曜日と、2 年生の必修科目である基礎ゼミ・基礎演習がある木曜日それぞれに対応できるように考えたためである。

前期は 5 月 24 日から 8 月 4 日まで、後期は 9 月 26 日から 1 月 26 日まで開設した。今年度の相談件数は合計 5 件であり、進路相談 1 件と履修登録関連 4 件であった。

過去の学習相談室に関する懸案事項となっていたのは、同室の存在について学生の認知度が低いということであり、特に 1、2 年生に対してもっと周知させる必要があるということであった。したがって宮崎（筆者）が担当している授業のうちで、1 年生と 2 年生が多く履修している授業（コミュニケーションと自己発見 I、基礎数学、統計学入門など）の中で時間をとってアナウンスを行った。また、学生相談室が開設しているのを目でわかるようにカフェテリアの入口や担当者の机の上にイラスト入りの案内板を掲示した。その結果、これまで見逃されて来たと思われる履修登録関連の相談などに対応することができたが、まだその数は少なく十分とは言えない。

今年度は相談員として 4 年生や大学院生の女子学生に依頼したが、後輩となる 1、2 年生の男子学生が相談をするには少し抵抗があるのではないかとの意見も頂いた。次年度以降は、相談員となる学生にもバリエーションを持たせて様々な層に対応できるような体制を整え、学生相談室の活動がより有意義なものとなるように努めたい。

## 2. Google Forms を活用した自主学習環境の改善について

また本センターは、資格学習支援センターや学内の共同研究と連携して、Google Classroom でもよく活用される Google Forms (以下、フォーム) を用いた小テストの作成についての研究を実施した。これは、学生の自主学習環境の改善を目的としている。

具体的には、小テスト作成に係る教員の負担削減を意図して、基礎的な数学演習の小テスト問題と解答の選択肢 (正解と不正解3つ) を自動生成し Excel 形式にて出力するプログラムを作成した。また、このような Excel 形式の素材となる小テスト問題・正答・選択肢の表からフォームを作成するスクリプトを整備した。さらに、このスクリプトから作成されたフォーム限定ではあるものの、フォームから逆に表に戻すスクリプトを作成、検証した。

## 3. 今後の課題

次年度以降の課題としては、第1により多くの学生に対して支援できるように、学習相談室の更なる環境改善を行うことである。第2に実際の授業と提携しながら、現在準備を進めているフォームによる自主学習プログラムをさらに整備していくことである。このように、より多くの授業や学生のニーズに対応できるようにしていきたい。

### ・資格学習支援センター

センター長 合田 和正 准教授

### 1. 「IT パスポート・簿記検定コンテスト」について

資格学習支援センターの目的は、本学学生の資格に関する学習を支援することである。これまで、就職課(CDC)、基礎学習支援センター、就職対策委員会、学内模擬試験である「IT パスポート・簿記検定コンテスト」実施メンバー、そして関連のある共同研究等と連携して資格学習に関する情報収集を継続してきた。本学では、ディプロマポリシー(2021)の中で、「IT パスポート合格および日本商工会議所簿記検定 (またはこれらと同等以上と認められる外部標準試験の合格) と同水準の技能を有していると認められること」と具体的な資格・検定の名称を明示しており、特に IT パスポートや簿記検定の受験・合格を学生に対して強く推奨してきた。「IT パスポート・簿記検定コンテスト」の開催は、そのための具体的な方策の一つである。

新型コロナ(COVID-19)の蔓延による同コンテスト開催中止や対面授業から遠隔授業への移行に伴う混乱などにより、上記の2つの資格・検定を含む各種の資格・検定の受験者が激減した。この点については、教授会における就職対策委員会の報告(CDC資料)でも示された通りである。令和4(2022)年度に入って、資格・検定試験の開催については、ある程度の落ち着きを取り戻し、多くの資格・検定試験が再開された。しかしながら、本学学生の受験状況は芳しくない数字で推移している。

同コンテストの開催にあたっては、教務課との連携を図っているが、本センターとしては模擬試験の問題作成や答案の採点を支援し、採点データを収集した。これらのデータ分析が進めば、次回以降の作問がもっと工夫できるようになり、さらには関連科目へのフィードバックが可能になる。これらの利活用は来年度以降の課題である。

これまでの活動では、情報収集に偏ってしまって、試験結果の分析やフィードバックに結び付いていな

いので、これらは来年度以降の課題としたい。また受験支援や関連学習の促進については、教員個人としては、ある程度できていたが、組織としてはできていなかったように思える。来年度以降は、例えば、啓発ポスターの制作・掲示や気軽に相談できる仕組み作りなど、より具体的方策を実行に移すことも課題である。

## 2. 日本語能力試験 N1 対策講座の開講について

今年度の新規の試みとして、日本語能力試験(JLPT)の N1 対策講座を CDC との連携により開講した。同講座の開設に際しては、**JLPT** 合格率を高めるために受講者に対して一定の受講制限をかけることにした。具体的には申込時にプレースメント試験を行い、一定の水準(N2 上位程度)以上に達した学生に限定した。その結果として、日本語能力試験 N1 合格者を出すという成果を得た。来年度も引き続き、この対策講座を開講予定である。また、N1 を合格していない学生や **JLPT** 未受験の学生に対する支援は、今後の課題である。

## 3. Google Forms を活用した自主学習環境の改善について

標記の事業について、基礎学習支援センターや学内の共同研究と連携して行った。詳しくは基礎学習支援センターの報告（上記）をご参照いただきたい。

1. 令和4（2022）年度活動実績

No.	令和4年度活動および実績	備考
1	ベンチャー企業向けインキュベート施設の運営 ・施設の利用希望者があれば、学内の利用できる場所の選定および運営規定等の検討を行う。 ⇒ 希望者なし	・平成22年度で小郡キャンパスのインキュベート施設は完全閉鎖（昨年同様） ・本学の他の施設での計画なし （今後は駅東キャンパスで検討？）
2	中小企業等支援等団体（行政等）との連携事業① ・福岡市経済振興局創業・経営支援課 ⇒ 実績なし ・福岡市経済観光文化局中小企業振興部経営支援課 ⇒ 福岡市トライアル発注認定事業評価委員	・福岡市は、スタートアップカフェ（運営：CCC 他）の運営が中心で、本学との連携セミナー等の開催なし ・評価検討会（Web）への参加（2回）
3	中小企業等支援公共団体との連携事業② ・福岡商工会議所商工振興本部 IT・創業支援 G ⇒ 福岡起業塾へ協賛して開催 ⇒ 福岡起業塾の受講生の創業経営相談	・福岡起業塾へ協賛、講師派遣（Web） 7/10, 17, 24, 31, 8/7（全5回）受講生 約20名 ・創業経営相談：8/20
4	学生ベンチャー支援活動 ・九州 NBC（ニュー・ビジネス協議会）が主催する「大学生発ベンチャー・ビジネスプランコンテスト」への応募の促進 ⇒ 本学からの応募者0名	・九州 NBC との連携事業なし ・ゼミで指導したものの応募者なし
5	中小企業支援団体等との連携事業 ・福岡商工会議所における経営安定化特別相談事業（倒産防止等）への相談員の派遣等 ⇒ 相談2回、定例会議1回	相談：なし 定例会議：メール会議のみ
6	中小企業「認定支援機関」の認定取得 ・今年度の目標：認定要件の充足 ⇒ 実績なし	・経営革新計画作成支援活動3件以上が必要であり、案件を紹介してもらうためには会議所等との連携が必要
7	その他 ・中小企業基盤整備機構等との連携 ⇒ 経営相談窓口：随時（TEL/メール、窓口）	・ベンチャー・中小企業等への支援事業に関する問合せや相談等に対する対応 ・経営支援会議（AD 研修）等にも出席

2. ポイントおよび反省点

・平成23年からの主な活動は公的機関等が主催するセミナー事業等への「協賛」「共催」などの連携事業が中心となっている。この活動が定着しつつあるが、開催日程や回数及び内容等は相手方の事業計画や予算等に左右される傾向にある。（昨年同様）

・昨年度の続き今年度もコロナ禍の影響により、各行政機関等のセミナー・講習等が中止もしくは縮小となり、本学と連携事業を行う機会が少なかった。なお例年通り、福岡商工会議所との連携事業（創業セミナー等）は行う事ができた。

・学生ベンチャー支援については、コミュニケーション不足もあり、学内の PR ができなかった。大学生 VBPC への応募は、今年も0名であった。

・中小企業・ベンチャー等の支援団体である福岡市や中小企業基盤整備機構等との連携事業（企画・開催）をもっと模索する必要がある。なお各機関と良好なコミュニケーションは継続している。来年度以降も活動目標として連携を継続したい。今後も、多様な事業（経営安定化特別相談、経営支援相談、インキュベーター

ト施設入居審査、ビジネスプラン総合相談会等々)への参加や連携を目指すべきと考えている。(昨年同様)  
・中小企業等認定支援機関の認定(経営革新支援実績がなかったため)は進まなかった。(昨年同様)

## ○令和4年度教育改革事業報告

### 初年次教育における課題探究を基盤とする実習の設計と評価

荒平 高章 准教授 (研究代表者)

#### 1. 事業背景

近年、データサイエンス教育の活発化により、データの分析・可視化・説明を想定した問題解決型学習(Problem Based Learning)が再び注目を集めている。しかし、現在の大学において初年次教育では、技能ベースではなく知識ベースでの教育が多くを占めており、同時期に一つでも多く実習系科目を設けることで、知識と技能を結び付ける経験を学生に与えることで上級生になった時により幅広い視野を持って勉学・研究・就活等に励むことが可能となる<sup>1)</sup>。

そこで、本事業では、初年次教育の中でも限定的な開講科目であるプレゼミ I・II を対象に課題探究を基盤とした問題解決型学習を実施し、高等学校と大学2年次以降の仲立ちを行い、受講生が大学教育・研究に対する心構えを修得するだけでなく、大学教育への取り組み方、研究への取り組み方に関する基礎的素養を修得することを目的とする。特に、初年次教育を想定しているため、受講生全員が目的を達成するために、教員側が設定する目標を適宜修正しつつ、柔軟な視野で対応することに配慮する。

#### 2. 事業内容

後期開講のプレゼミ II において、ペットボトルロケットを題材としたPBLを実施した。その際、2年生の基礎ゼミ学生も含めることで、初年次教育対象の1年生と初年次教育を受けた後の2年生で取り組み方にどのような違いがあるかを検証した。具体的には、「ペットボトルロケットを遠くへ飛ばすためにはどのような設計にしたらよいか」という指示を最初に学生に与え、グループで自由に調査をしてもらい、その後試作してもらった。試作したペットボトルロケットを試射してもらい、必要に応じて再度作り直しや検証を行った。最後の時間に一度だけ飛ばしてもらい、飛行の様子や試射との違いなどをグループごとに考察してもらった。

#### 3. 結果と考察

作製に係るグループワークにおいては、1年生、2年生に違いはほとんどなく、インターネットなどで調査する人、ペットボトルロケットを作製する人、実験レポートをまとめる人といった役割分担をきちんと行った上で実施できていた。グループワークの取り組みは、プレゼミ、基礎ゼミ双方において様々な形で実施しているため、その効果が出たものと考えられた。また、実習後に提出してもらったグループごとのレポートでは、ただペットボトルロケットを作製した記録ではなく、どのように設計すればより遠くへ飛ばすことができるのかについて高校物理を用いた設計やプロトタイプによる試行錯誤の過程をシミュレーションで再現した後に最適条件での設計などを行っていた。これらは1年生のグループであり、これまでのプレゼミで実施してきた他の実習での経験等を教員が誘導することなく学生自身で筋道を立てて実習に取り組むことができたとと言える。一方、2年生のグループにおいても1年生グループと同様に理論的計算や、シミュレーションによる予測などの知見を応用したペットボトルロケットを作製していた。2年生グループは著者の基礎ゼミでの実習活動が活かされていただけでなく、グループの中に数名ずつ1年次に著者のプレゼミを履修していた学生が含まれていたことも少なからず影響を与えていたと考えられる。

#### 4. 最後に

本稿では、初年次教育における問題解決型学習を取り入れた実習の実施報告を行った。詳細は述べていないが、学生が作成したレポートの内容において、問題解決へのプロセスに関する工夫が随所に施されているだけでなく、ペットボトルロケット実習以外での学生の取り組み状況などについてもさらに分析可能な部分があるため、それらについては今後紀要などで発表をしたいと考えている。

#### 参考文献

1) 石井美紀代, et al. 「初年次教育における問題解決型学習の効果」『西南女学院大学紀要』 16 (2012)、25-34 ページ。



写真 ある1年生グループのペットボトルロケット発射風景

## ○共同研究報告

### カウンセリングデータに基づく患者の心理状態抽出への試み

荒平 高章 准教授 (研究代表者)

田中 崇恵 (筑波大学、共同研究者)

小柳 響輝 (情報ネットワーク学科3年、研究協力者)

#### 1. 研究背景

近年のデータサイエンス分野に関する学問・研究の普及により、文理関係なく様々な分野でデータを用いた分析や分析手法の開発、人工知能による将来予測といった様々な研究が実施されている。特にテキストデータに関する分析では、テキストマイニングを用いた研究が多く、その応用の可能性は多岐に渡る<sup>1)</sup><sup>2)</sup>。

一方、コロナウイルス感染症問題が契機となり、大学において遠隔形態による学生間コミュニケーション不足等の問題によって休学・退学者が増加している他、精神的疾患を持つ学生も増えている。そのような状況下でカウンセラーによる心理カウンセリングによるデータが蓄積されており、これらのデータをど

のように利活用していくのかについて問題になっている。その取扱いについても慎重にならざるを得ないが、現状では心理カウンセラー個人による診断に依存しており、その診断の一般化が望まれている。

以上により、本稿では、カウンセリングデータを基に特徴語などの抽出・分析を実施し、基礎的な検討を試みたので報告する。

## 2. 方法

コードを試作する作業環境として、言語は Python を選択し、テキストの分割・分類にはオープンソースの解析エンジン Mecab を使用した。サンプルデータとしてカウンセラーが学生(クライアント)に対して実施したカウンセリングの会話データを使って単語のカウントを行い、頻出している単語の集計と単語どうしの相関関係について調査した。

実験の流れとしては、以下の通りである。

- ①サンプルデータ(.txt ファイル一つ)を読み込み、カウンセラー/クライアントの文章を取り出す。
- ②Mecab を使い品詞・活用形ごとに分割する。
- ③分割した単語データ(助詞・助動詞は除く)をもとに単語の出現数をカウントする。

## 3. 結果と考察

集計した結果、会話の中ではクライアントは 305 種類、カウンセラーは 330 種類の単語が登場していた。中でも指示語とつなぎ表現(えー、うーんなどの単語)の頻出度が高かったほか、「夏休み」「授業」「親」「疲れ」のような身近な話題に触れるような単語も散見された。また、助詞・助動詞は集計する際にカウントしないように設定していたが、頻出度が多い単語として「の」「ん」「い」などひらがな一文字が頻出語句の上位に上がってきていた。

以上の実験結果から、現時点ではより詳しい分析を行うにはデータの前処理が不十分であることが示唆された。特にひらがな一文字が多く集計されているのは、動詞や形容詞の活用語尾や口語表現が分割されて名詞としてカウントされているのが原因と思われる。

## 4. 最後に

本研究では、カウンセリングデータを基に特徴語などの抽出・分析を実施し、基礎的な検討を試みた。データの分析方法や解析方法については改善の余地があるため、今後はそれらの対策を講じつつ、カウンセリングデータの詳細な分析(遷移図・共起ネットワーク図など)を実施していきたい。共同研究期間としては今年度で終了となるが、今後も研究は継続して進めていくため、進展があれば報告させて頂きたいと考えている。

## 参考文献

- 1) 織田幸美 「学生相談室企画としての構成的グループエンカウンター実施についての考察-テキストマイニングによる感想の分析」『研究紀要』79 (2023)、 pp. 1-12。
- 2) 古田雅明、中田香奈子、栗田麻美 「精神科臨床心理実習における教育目標と実習生の学び 実習記録のテキストマイニングから」『人間生活文化研究』2019. 29 (2019)、 pp. 791-798。

## ○教育実践報告

### 留学生の日本語学習状況と学習意識

古川 幸子（非常勤講師）

#### 1. はじめに

筆者は、20年以上にわたり外国人留学生への日本語教育に携わってきた。外国人留学生が、入国後に必要な基礎的な日本語力と大学・大学院進学を目指してより高度な日本語能力を習得するための日本語学校に勤務し、多くの外国人留学生を大学・大学院に進学するサポートをしてきた。日本語学校では、個々の能力や事情によって、1年、1年半、2年と学習期間が異なる留学生が、それぞれ日本での生活に必要な基本的な会話や読み書き、進学先で必要となる「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を限られた期間内で適宜身につけることを目標としている。最終的には、進学(入学試験)に必要な「日本語能力試験(JLPT)」N1、N2、N3の取得、「日本留学試験(EJU)」の高得点取得を目指して教育を行っている。

筆者は現在、九州情報大学で「日本語」の科目を担当し、外国人留学生に対して日本語の教育を行っているが、それはつまり、かつて外国人留学生を送り出していた先で日本語教育に関わることになったことを意味している。そこで聞こえてくるのは、学生、教職員、双方からの「日本語力が足りず、試験もレポートも難しい」という声である。大学において「日本語」の授業を担当するにあたり、日本語学校という準備教育課程に携わってきた経験を踏まえて、大学の授業と留学生の日本語力の溝をできるだけ埋めるべく授業計画を立ててきたが、近年は留学生の母国が多様化し、非漢字圏からの留学生も増えてきているため、学生側の弱点も多様化している。その結果、同学年の学生の間にも、出身国の違いによって日本語の能力に格段の差が生じているため、「日本語」の授業に望まれる役割にも大きな変化が起きているように感じている。

本調査は、現在、本大学の留学生が日本語で何ができ、何ができないと感じているのかを具体的に把握し、できないと感じていることに応えるために、どのような授業計画をするべきかを考え、今後の「日本語」の授業に活かすことを目的としている。そのために以下に記すとおり、留学生の日本語能力、学習状況、そして学習意識等についてアンケートを行い、その結果について考察した。

#### 2. アンケートの調査概要

##### (1) アンケートの表題および項目

「学生の日本語学習における状況と意識調査」

##### (2) 調査期間：令和5年1月16日～令和5年1月27日

##### (3) 調査対象：九州情報大学の留学生 「日本語Ⅱ」「日本語Ⅳ」受講生35名

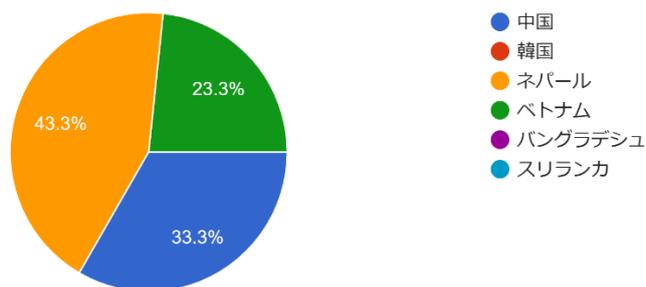
##### (4) 調査方法：Google formsにより回収

##### (5) 回答状況：日本語Ⅱより11名

日本語Ⅳより19名

合計30名

回答者の国籍の割合は次のとおりである。



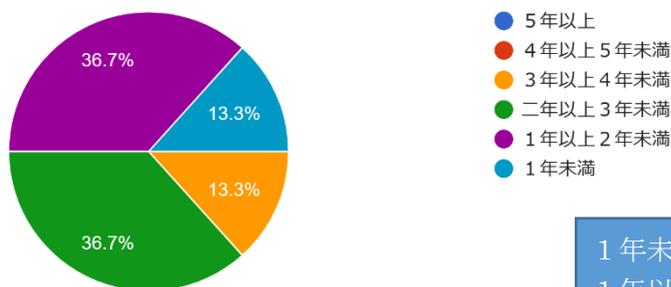
- 中国
- 韓国
- ネパール
- ベトナム
- バングラデシュ
- スリランカ

ネパール	13人
中国	10人
ベトナム	7人

### 3. アンケートの項目と結果

それぞれのアンケート項目とその回答結果は下記の通りである。円グラフは回答の割合を示したものである。

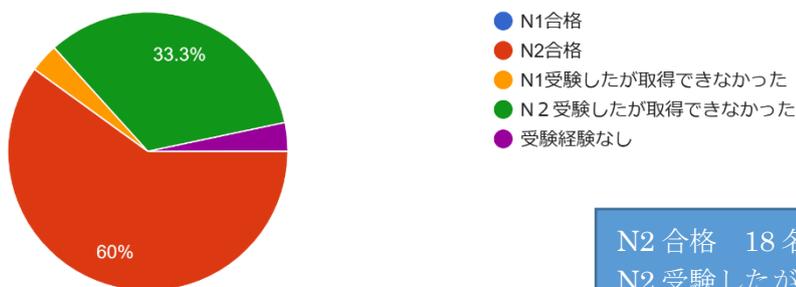
#### 項目1 大学入学前の日本語学習期間



- 5年以上
- 4年以上5年未満
- 3年以上4年未満
- 2年以上3年未満
- 1年以上2年未満
- 1年未満

1年未満	4人
1年以上2年未満	11人
2年以上3年未満	11人
3年以上4年未満	4人

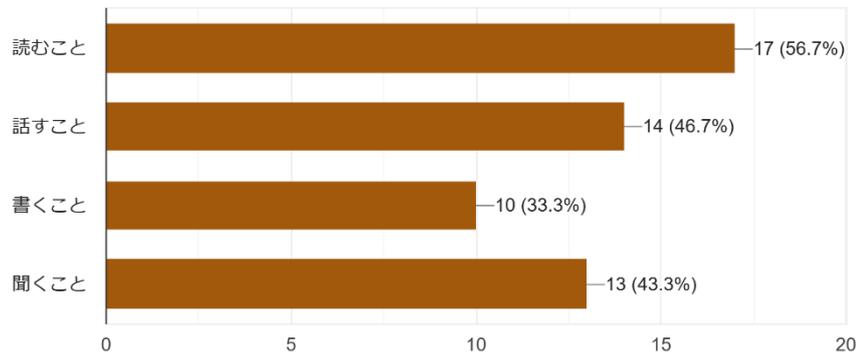
#### 項目2 日本語能力試験について。取得しているレベル。



- N1合格
- N2合格
- N1受験したが取得できなかった
- N2受験したが取得できなかった
- 受験経験なし

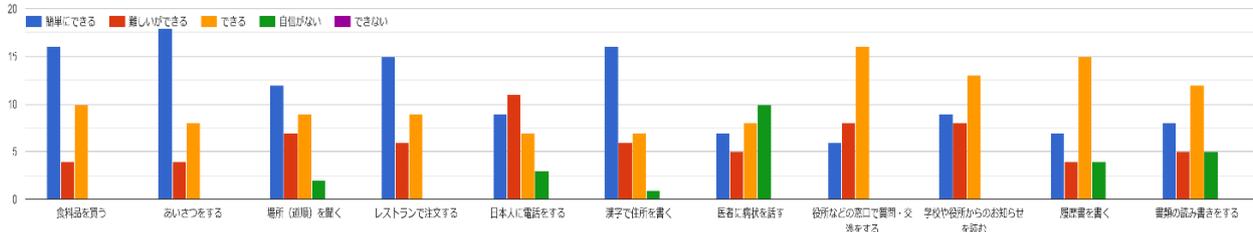
N2合格	18名
N2受験したが不合格	10人
N1受験したが不合格	1人
受験経験なし	1人

項目3 日本語のどの技能に自信があるか（複数回答可）

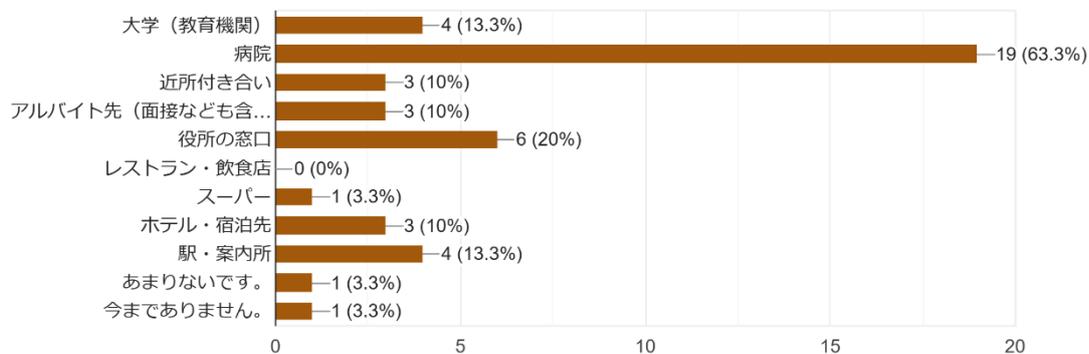


読むこと	17名
話すこと	14名
書くこと	10名
聞くこと	13名

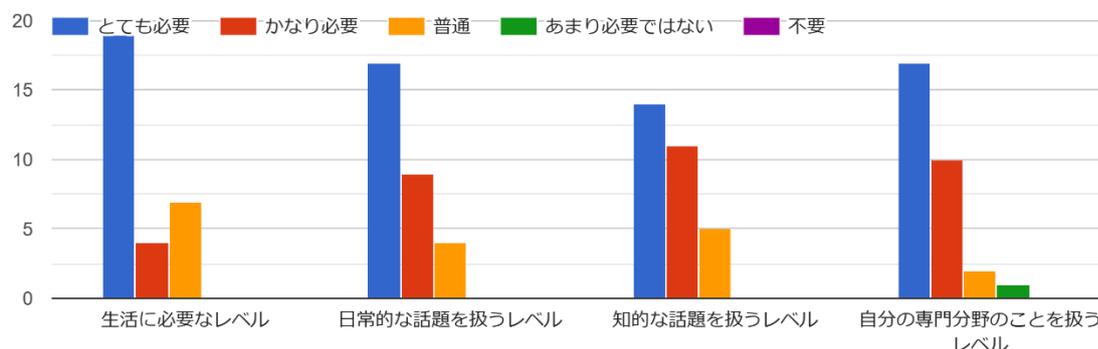
項目4 どのような場面で日本語を使って対応できるか。



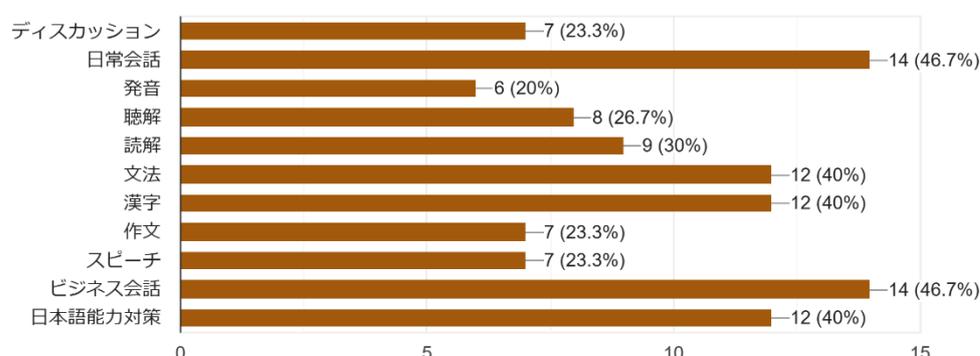
項目5 日常生活の日本語について。日本語ができなくて困ったり、嫌な思いをしたりした場所・場面があるか。



## 項目6 今現在の日本語の学習必要度



## 項目7 大学の日本語の授業でもっと教えてほしいこと。(複数回答可)



## 項目8

現在の日本語の授業について、問題、希望など。(記述自由、原文のまま。)

- 授業と一緒にビデオや時事ニュースを見たいです。
- 1日に学ぶ量が増やして欲しいです。
- 毎月一回日本語で、一つテーマについて授業でスピーチ コンテンツをすれば、必要に大事なことだと思っています。
- 日本語学校いる時毎日日本語能力試験の勉強あったが、今なかなかないので、能力対策講座があった方がいいと思う。

## 4. アンケート結果についての考察

### (1) 大学入学前の学習期間について

上記アンケートの項目1によると、大学入学前の日本語学習期間は1年～3年が最も多く7割を占めている。一般的に言って日本語学校では二年間で大学進学を目指すコースが多く、最初は文字から学び、日本語能力試験N2取得までを目標とする場合が多い。この二年間という学習期間は、大学入学前に基本的な日本語力を身につけるに足る十分な時間であると言える。一方で、学習期間1年未満の学生が1割いることは筆者にとって予想外であった。なぜならば日本語初学者が、一年足らずの時間でN2レベルに達することは到底困難だからである。

## (2) 日本語能力試験、取得しているレベルと自信について

上記アンケートの項目2によると、順調にN2を取得できている学生が半数以上であり、N2を受験したが取得できなかった学生3割を合わせると、ほぼN2レベル学習済の学生が9割を占めていることが分かる。主な大学が外国人留学生の入学試験で、合格目安として挙げている「日本語能力試験N2相当の日本語力を有するもの」という基準には到達しているように見えるが、N2を受験したが合格できなかった学生たちが何が理由で不合格であったかは明確ではない。ただ、項目3「日本語のどの技能に自信があるか」というアンケートの回答では、読むこと、聞くことの技能に比較的自信があると答えていた一方で、話すこと、書くことに対する自信はそれほどなく、日本語を通してものごとを理解することはできても、日本語で発信する自信が持てないと感じていることがわかる。日本語学校では大学入試を突破するための「試験」対策として、やはり読み書きに重きを置かざるを得ない。実際「日本留学試験」の日本語の科目は「聴解」「聴読解」「読解」の力が問われている。よって、その試験形式に対応するための準備をしてきたことが影響していると思われる。

では、学生たちは日常生活、学校生活の中で具体的にどのような場面で日本語を使いこなし、また伝わらず困っているのだろうか。

項目4では、実生活で日本語を使ってどのくらい対応できるか尋ねたところ、簡単に対応できることとして、「挨拶をする」が18名と最も多く、次に「食料品を買う」「漢字で住所を書く」が16名、「レストランで注文する」が15名と続いている。基本的な生活日本語(N4、N3程度)なら、半数以上の学生が自信を持って対応できると感じているようだ。簡単ではないができると感じていることに関しては、「役所などの窓口で質問、交渉をする」で16名、「履歴書を書く」で15名であった。日本滞在歴が長くなると役所とのやり取りが少なからずあると思われるので、その経験をもって「できる」と感じているのだろう。「履歴書を書く」は、できると思っている学生も多いが、自信がないと回答している学生も数名いる。この点については、非漢字圏の学生にとって漢字での記入が問題になっているのではないかと。

できないとは言わないまでも、「自信がない」が最も多かったのは「病院で病状を話す」の10名だった。「簡単にできる」と回答している学生の数を上回っている。細かな症状を伝えること(語彙力)に不安を感じているのかもしれない。項目5のアンケート「日本語ができなくて困ったり、嫌な思いをしたりした場所・場面があるか」の回答でも、病院が最も多く6割を占めている。言い方を間違えれば処置や処方される薬も違ってくるであろうが、その当事者にならなければ使わない表現や語彙は、なかなか定着せず使いこなせないという状況なのだろう。

## (3) 今後の日本語の授業に必要なことについて

項目6「今現在の日本語の必要性」では、どのレベル(分野)の日本語が特に学習の必要を感じているかを尋ねたところ、「生活に必要な分野」が最も多く、回答者のうち2/3の学生が必要だと感じており、次に多かった回答が「日常的な話題を扱う分野」であった。「自分の専門分野を扱う」ことよりも、「生活に必要な日本語を習得する必要がある」と感じているように見える。N2レベルの学生が感じることとしては妥当かもしれない。項目7の「大学の日本語の授業でもっと教えてほしいことは何か」の回答を見てもばらつきはあるものの「日常会話」「ビジネス会話」が同数で多く、やはり読むこと、聞くことの日本語よりもコミュニケーションのための日本語を求めていることがわかる。友人やアルバイト先のスタッフなど日ごろ付き合いのある人々とのコミュニケーションではなく、自分の命や生活を守るための公的な場所や、かしまった場面にふさわしい言葉遣いなどを扱う会話の授業を中心に行う必要があると感じる。また、授業最後の簡単なアンケートでは「ビジネス会話」を授業で扱ってほしいというリクエストが毎年あるが、受講生は1、2年次が最も多く、ビジネス会話よりも基礎的な技能の習得がまず必要である。「ビジネス会話」は本来の「日本語」の授業とは違う別科目、たとえば留学生のための就職支援講座として開設することができれば、よりニーズにこたえられるのではないだろうか。

## 5. おわりに

本調査の結果分かったことは、日本語能力試験などの資格取得、大学・大学院進学を主な目標にしている日本語学校での準備段階とは異なり、大学入学後は日常生活に必要な日本語を身につけたい、またより深めたいと考える学生が多いということである。筆者の現在の授業は、大学で必要と考えられる能力を培うために、語彙、漢字、読解、作文を中心に構成しているため、学生側のニーズには十分に応えられていない可能性がある。もちろん、文献を読み、レポートを書き、発表をするための技能は大学では必要不可欠であるし、先に述べたように、学生自身もその力により一層の磨きをかける必要性を強く感じてはいる。しかしながら、彼らが必要とされる読み書きの習得が十分に出来ない原因の一つは、大学で必要とされる以前の生活レベルの言語能力が不足しているからかもしれない、ということアンケートの回答結果から推測できるのである。

さらに言えばアカデミックな能力を鍛える以前に、先ず日本での生活の基盤を安定させ、必要に応じて自己をきちんと表現するための日本語の習得が必要なのは当然のことであるが、それを身に付けるための機会が彼らの生活の中には不足しているのではないだろうか。彼らは、日本語の文化的背景、日本人のあいまいな表現、場面に応じた独特な言い回しなどを理解し始めたからこそ、さらに踏み込んだ日常会話に興味を持ち、必要だと感じているにもかかわらず、留学生同士の交流が中心の日常生活やアルバイトを通してだけでは、必要な力を十分に習得することが出来ないであろう。日常で自分の想いを伝えられるようになってはじめて、大学で発表ができ、レポートを書くことができる。さらには日本での就職活動の際に自己PRが可能となり、面接での受け答えをスムーズに進めることができるのである。したがって本調査をとおして筆者は、授業の中にもっと日常レベルの言語習得のための仕組みが必要であることを強く感じた。

大学で学び、人生の次のステップに進むためにも、日本語の授業が有意義であることが、留学生にとって非常に大切なことである。今後もさらに学生たちにより細かいアンケートを取りながらニーズを探り、学生にきちんと寄り添った効果的な授業の構築に努めたいと考えている。

### ◆原稿募集

教員各位の教育・研究活動に関する原稿を募集します。たとえば教育実践報告、研究報告、学会報告、書評、文献紹介、翻訳などです。『研究論集』に掲載するほどの分量はないが、論文執筆のための準備作業として書き留めておきたいこと、日頃の教育・研究に関連して思うことなどでも結構です。ただし『研究論集』との違いを明確にするため論文は掲載しません。また原稿の学術的水準について一定の配慮をしてください（引用ルール・モラルの厳守、参考文献の明記。レジュメやパワーポイント資料にかたよったものは掲載しません）。詳細は所報編集小委員会までお問い合わせください。

#### 九州情報大学学術・教育研究所報 第6号

発行日 令和5(2023)年3月31日

発行所 九州情報大学学術・教育研究所

所報編集小委員会

〒818-0117 福岡県太宰府市宰府六丁目3-1

TEL 092-928-4000

※掲載された原稿の著作権は本学に帰属します。  
無断引用を禁止します。